

# 豊田への 想い

東京大学教授  
西村幸夫



## 足助から始まって そのときまで

### 足助との出会い

私の豊田市との付き合いは足助から始まりました。初めて足助を訪れたのは昭和53年でした。この年に、足助で第1回の全国町並みゼミが開かれ、私はそこへ一学生として参加しました。当時大学院に入りたての23歳だったのを覚えています。

全国町並みゼミというのは、町並み保存連盟（後にNPO全国町並み保存連盟となる）が主催する年1回の総会で、この年に記念すべき第1回の大会が足助と有松（名古屋市緑区）で連携して開催されました。この催しは現在も続いています。これはおそらく足助で開催された初めての全国大会ではなかったでしょうか。

そのとき足助のまちを訪れた印象は、ゴミが一つも落ちていなくて、手入れの行き届いた通りと店構え、白と黒の重厚な町並みといったものでした。後で聞くと、全国からの訪問者のために入念に準備され、掃除も万端やられていたということです。その心根に頭が下がります。

もちろん当時から足助のまちは個性あるまちづくりを進めている自治体として名前が知られていました。その後三州足助屋敷のオープンに始まり、社会福祉施設と観光施設とをミックス

したユニークな施設である百年草の建設と運営、レストラン参州楼、夜桜ならぬ香風溪の「夜楓」のライトアップなど、実に先進的な取組を進めてこられ、今日に至っているのですが、どれもどちらかというと行政主導型で行われてきました。行政側に大きな構想力を持った人材がそろっていたからですが、このことは逆に言うと、行政側に力があつたために、行政側にとって実現しやすい事業は進められたのですが、例えば町並み景観の保全のように地域住民の合意がぜひとも必要な手間のかかる仕事はやや後回しになった感があるともいえます。といっても、何も手が付けられていないわけではなく、まちづくりのための議論は広く浸透しており、住民の皆さんの意識も議論のレベルも相当な水準であることはだれしも実感してきたところです。

その後、私はおそらく延べにするとかれこれ30回前後は足助に通つていようと思います。正確に数えたことはありませんが、もつと多いかもしれせん。ある時は足助の町並み保存運動の歴史資料をまとめるというところで、足助の町並みを守る会のお世話になって民間の助成をもらって取りまとめをしましたし、「歴史的環境整備街路事業（歴みち事業）」や「街並み環境整備事業（街環事業）」などといった当時の建設

省の事業に関連して、事業の中身を改善するための相談に乗るといったこともありました。また町の事業として行われていた住宅マスタープラン作成の一環として山ろく部に畑付き住宅を分譲するという夢のある企画に付き合ったり、逆に町並みの整備が通り一遍の民芸風になるのをどうしたら改善できるかという議論を町の皆さんとやってきたりもしました。

また、台湾から日本という文化庁長官にあたる文化建設委員会の主任委

員一行を案内して足助を訪れたこともありました。実は足助はまちづくりの実践地として台湾でも有名なのです。私はかつて『町並みまちづくり物語』（平成9年、古今書院）という本の中で足助のまちづくりを紹介したことがあるのですが、この本は出版されて間もなく台湾で翻訳され、『故郷魅力倶楽部』という名前前で1万2千部以上も売れたということも貢献しているかもしれません。この本は足助の書店にも置かれているので、ご覧になった人もおられるかもしれません。



西村幸夫さん

昭和27(1952)年、福岡市生まれ。東京大学都市工学科卒、同大学院修了。明治大学助手、東京大学助教授を経て、平成8(1996)年より東京大学教授。この間アジア工科大学助教授(バンコク)、MIT客員研究員、コロンビア大学客員研究員、フランス国立社会科学高等研究院客員教授などを歴任。専門は都市計画、都市保全計画、都市景観計画など。工学博士。

## 足助のさき

そんな足助との付き合いでしたが、豊田市に合併するところからまた新しい展開が始まりました。豊田市は都市整備の方針の一つとして「歴史を活かしたまちづくり」を挙げ、その重点的な地域のひとつとして足助が採り上げられたのです。豊田市の都市整備のスタッフとの新しい共働が始まったのです。

豊田市という新しいことにチャレンジするという印象が強かったのですが、驚いたことに、という失礼かもしれませんが、市が、市のスタッフがとても歴史に理解があり、やる気満々なのです。財政的に豊かな都市というものは働く人の心も豊かにする（こともある）ものなのだとその時初めて実感したのです。

旧・足助町時代にはかなわなかった下水道の整備や水道施設のアップグレードも着々と進み、並行して歴史的な町並みを生かしたまちづくりも進められています。成果が現れるまではもう少し時間がかかりそうですが、まちづくりというものはいつも時間がかかるものなのです。間違った方向に進んでいないことが重要です。

歴史的町並みが今後どのようなふうになっていくかはこれからの多くの関係者の努力によるものですが（もちろん私もその関係者の一部に加えさせていた

れるのです。

名鉄豊田市駅前立って、いかに都市整備の構想が形となって実現しているのかを目の当たりにして、その実感はさらに強くなりました。ここにこそ、都市計画と都市整備の融合という本来の都市づくりの姿があるのです。そのためには個々の自治体が財政的に強くならなければならないということ、つまり、地方主権ということはどういう現実によって裏打ちされていないかならないということ、豊田市の豊かな都市づくりの現実が教えてくれるのです。

私が専門とする歴史や文化を生かしたまちづくりにおいても同様です。足助との付き合いから始まった私と豊田市との関係ですが、計画というものが本来どういふものであるべきなのかを豊田市から教わりました。日本でこうした実感を持つことができなかったのは、それほど実践力のある都市がほかに少ないからです。私は豊田市から計画が目指すべき、ひいては地方主権が目指すべき一つの具体的なイメージを学ぶことができました。足助のさきに、このようなまちづくりの実践へ向けた確実な道筋とそこへ至る課題を引き受けることになったのです。

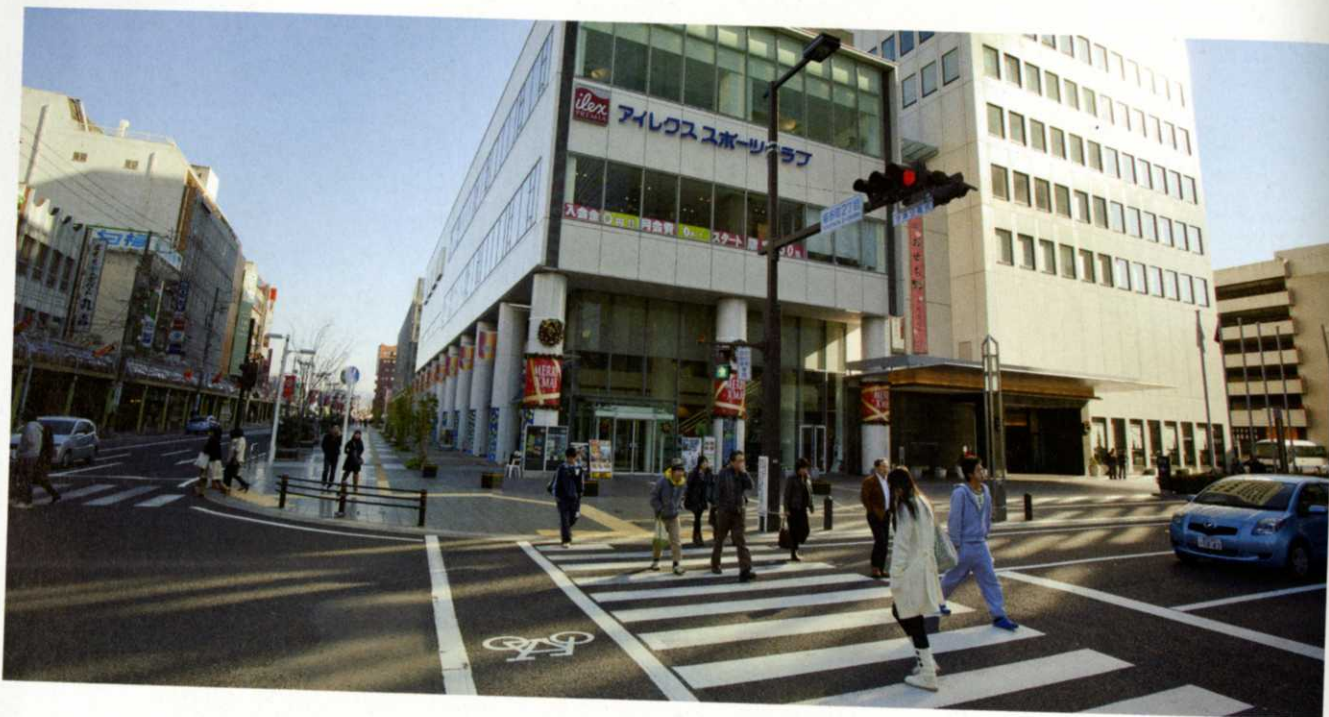


きたいと思つていますが、豊田市のスタッフと一緒に仕事をすることによって実感したことがあります。さきほどの行政スタッフのやる気という点もあります。が、具体的なまちづくりにおいても、構想とその実現とが一本線で結ばれているということを感じます。

一般的な自治体では、計画立案は単に計画を作る話であつて、それが実施されるかどうかは別の話だ、と

いう認識が普通です。実行予算がなかなか伴わないからです。その点、豊田市は計画がかなりの確率で実現されていくという、都市計画に携わる人間にとってはまさに理想的な状況にあるのです。理想的と言つても、欧米ではこれが普通なのですが、日本の現実の方がおかしいのです。

そのことは何を意味するかというと、計画立案がそのまま現実につながるの、どうしても本気にならざるを得ないということです。理想論だけの計画や過去の計画の単純な焼き直しでお茶を濁すようではだめで、現実的な詰めが最後までやられていないといけないということです。本来、計画というのは実行されることを前提として立てられるべきであるという当たり前のことを、そしてそうした前提があると本当にいい計画へ進化していくものかどうかを、豊田市の実践は教えてく



我与丰田市结缘始于 1978 年参加在足助举办的第一届全国街道专题讨论会。足助是一个从当时就着手开展富有特色的城市建设的自治体。它开展了很多先进的活动，如夜间照亮三州足助屋敷和香岚溪等，它还是一个居民的城市建设意识非常强的地区。合并后，丰田市提出了“发挥历史特色的城市建设”的方针，并将足助选为重点地区。从丰田市的城市建设做法上可以看出，构想和实现是用一条线联系起来的。对于从事城市规划的人而言，这是一种很理想的情况。

Passei a me relacionar com a cidade de Toyota em 1978, quando participei do 1º seminário nacional das cidades realizado em Asuke. Desde aquela época, Asuke era uma cidade que promovia um planejamento da comunidade característico. Dedicava-se em assuntos avançados como iluminação de Sanshu-Asuke-Yashiki e Korankei, e o seu povo tinha uma elevada conscientização sobre o planejamento da comunidade. Após a fusão, a cidade de Toyota apresentou como política municipal, “planejamento da comunidade aproveitando a história”, e escolheu Asuke como distrito prioritário. Ao observar o progresso do desenvolvimento da cidade de Toyota, sinto que a concepção e a realização se unem numa só linha. Isto é uma situação ideal para as pessoas envolvidas com o projeto de urbanização. Quando me coloco em frente à estação de Toyota-shi (Meitetsu) e diante dos meus olhos, vejo o plano de desenvolvimento urbano sendo executado, sinto a figura propriamente dita do que vem a ser um desenvolvimento urbano e o que significa integrar o projeto de urbanização com o desenvolvimento urbano.

My relationship with Toyota City began in 1978, when I participated in the 1st Zenkoku Machinami Seminar (national townscape seminar) held in Asuke. In those days, Asuke was already taking unique town-building initiatives, including the development of Sanshu Asuke Yashiki and illumination of Korankei Gorge, with residents' high commitment to town building. After the merger, Toyota City set up a policy of “history-oriented town building” and designated Asuke as a priority area under the policy. It seems to me that such ideas and their implementation are directly connected in Toyota City's efforts of town building, which is an ideal condition for those who are involved in urban planning. Standing in front of Meitetsu Toyota City Station and seeing the urban development plan being implemented in Toyota City makes me realize that the ideal form of town building, requires a fine fusion of urban planning and urban development.